

私たちは
未来を切り開く

～コロナ禍で見えた社会、世界、学び～

埼玉大学教養学部



はじめに

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年度はオンライン授業の導入や入講の制限など、埼玉大学教養学部でも「新しい生活様式」を反映させた新学期で幕を開けました。埼玉大学に在籍する学生に加え、本学の協定校へ留学をしている学生や留学準備をしていた学生にとっても、波乱の一年でした。

本論文集は、コロナ禍に協定校へ留学中だった学生、また留学準備をしていた学生などが、どのように困難と向き合ってきたかを記録しました。

埼玉大学教養学部では、毎年多くの学生が派遣留学制度を利用して、海外の協定校へ留学しています。2020年度は、29人の教養学部生が12か国へ派遣され、語学の壁に悩み、文化の違いに戸惑いながらも、充実した留学生活を送っておりました。

しかし、留学先での生活は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、一変しました。外務省による渡航危険レベルが3に指定された国に留学していた学生に対しては、本学国際室より2月下旬に帰国要請をし、留学生たちは留学半ばで順次帰国することとなりました。6月下旬には本年度の派遣留学の中止が決定され、一抹の望みをもって留学準備に取り組んでいた学生は、留学の中止、または、留学開始時期の延期の選択をせまられることとなりました。

去年は、さまざまな計画や希望をもって留学した学生、夢の実現のために準備を進めてきた学生にとっては、心残りのある年になってしまいました。その一方で、これまでに経験をしたことのない困難の中でも、学生たちが多くの学びを得たことには、大変心強く思っております。

それぞれの学生の視点から見たコロナ禍における学びや留学について、ご一読いただけますと幸いです。

最後に、本論文集に寄稿してくださった学生のみなさま、出版助成をしてくださった埼玉大学教養学部に感謝申し上げます。

2021年3月

埼玉大学教養学部 グローバル共修推進委員会



Contents

1. オランダ・フリシンゲンで観光について学ぶ 相吉澤紗貴 p3
2. 7か月間のアメリカ・ニューハンプシャー留学を終えて 家田知世 p8
3. ポーランド・ワルシャワ留学からの帰国 中原知希 p13
4. コロナ後のグローバル活動を見据えて 名倉佳輝 p21
5. イタリア・トリノ留学を半年間経験して 野崎那由 p26
6. 憧れのフランスでの留学を経て 野田頭真永 p30
7. 留学を延期し心新たに 荒井紫乃 p35
8. 留学への思いをオンライン新歓にぶつける 鎌田ほのか p39
9. COVID-19 パンデミックを日本で経験して p44



オランダ・フリシンゲンで 観光について学ぶ

教養学部ヨーロッパ・アメリカ文化研究専修ヨーロッパ文化専攻 4年

あいよしざわ さ き
相吉澤紗貴

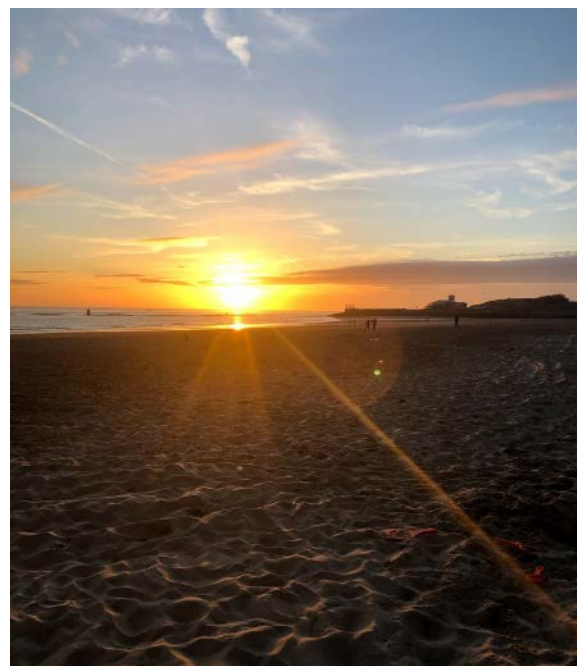
私にとって新型コロナウイルス感染症の影響による留学中止と早期帰国は、とてもショックで悲しいものでありましたが、同時に自分の将来を真剣に考える機会をくれるものでもありました。

私は、オランダとベルギーの国境に近く、海がきれいなフリシンゲンという町に留学していました。オランダに渡航したのは2019年8月の夏期休暇の真っ最中で、ビーチには隣国からの多くの観光客がいました。夏には友人と昼と夕方にビーチに行ってただ寝転がり、ワインを飲むこともありました。秋や春の天気の良い日には、夕焼けを見に行ったり、ピクニックをしたりと、私にとってフリシンゲンのビーチは、現地の友人と多くの時間を過ごした思い出の場所です。

8月はキックオフ（学期の始まり）のため、隣町では学生が大勢参加するパーティが開催され、音楽やビールを楽しみました。大音量の音楽に合わせて学生たちは自由に



フリシンゲンの夏のビーチ。



フリシンゲンの春のビーチ。



キックオフパーティ。

踊り、帰り道は疲れて歩くのが精いっぱいだったことを覚えています。また、他国から留学している学生のほとんどは、フリシンゲンでシェアハウスをしています。ハウスパーティーに行くだけで友人の友人と仲良くなり、交流の輪が広がります。このように、私は多国籍で多くの友人に囲まれた留学生生活を過ごしていました。

私はそこで観光マネジメントを学んでいました。具体的には、観光をどのように構成するか、サステナビリティや文化、マーケティング、ファイナンスの点から考えていました。私がこの

学部を選んだ理由は、旅行が好きで、将来は観光業で働くという目標があったからです。

この学部では知識を詰め込むのではなく、実践的なプロジェクトを行いながら知識を身に付けることの方が多かったため、私はインプットとアウトプットに苦戦していました。グループプロジェクトを行う過程で、他メンバーの負担になりたくないという思いから、関連動画を見て勉強した後、友人に質問して理解していました。

このグループプロジェクトは、私にとって楽しさ1割、苦しさ9割のとても大変なものでした。私の学部には日本人どころかアジア人すらおらず、自分と全く異なる文化に触れて、毎日が未知の文化交流のような状況でアウェー感を味わったこともありました。あるグループプロジェクトでは、私以外のメンバーが全員オランダ人でした。私を含めた会話では英語を使っているものの、急にオランダ語に変わって私は内容が分からず、これはプロジェクトに関係するのだろうか、もし関係ないのならその内容を聞く必要もないし、



オランダの伝統工芸の木靴。プロジェクトで、この企業の観光誘致におけるマーケティング案を作成。



プロジェクトのメンバーで木靴を履いて撮影。

迷惑かもしれない……と考えることが多かったです。

メンバーとの関わり方で悩みましたが、プロジェクトは円滑に進み、それぞれの得意分野を生かしたクリエイティブで効果的なプロジェクトを構成できたと思います。先生らや担当した企業の社長から高評価を受けたことが、とても印象的でした。

このように大学での勉学に励み、苦勞もしましたが、旅行を通して観光について考えることも多くありました。私がオランダを留学先として選んだのは、旅行のしやすさがあるからです。オランダ国内はもとより、ベルギー、フランス、ドイツ、ポーランド、リトアニア、イギリスのイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドに行きました。

各国の美しさに魅了される反面、違和感を覚えることもありました。強くそれを感じたのは、イギリスのロンドンでした。私はイギリスが好きで、留学前にも何度かイギリスに行ったことがあります。3回目のロンドン旅行で、繁華街や人通りの多い道には必ずホームレスの人々がいることがとても気になりました。お金がなくて食べ物が買えないと書いてある段ボールを持っている人、犬を連れている人、毛布にくるまりただ動かない人、障害のある人など、ホームレスといってもさまざまでした。通りすがりの人々の中には、彼らにコインを与える人もいれば、ののしっている人さえいました。

実は、ロンドンにホームレスの人々がいることを私は以前から知っていましたが、気に留めていなかったのです。しかしながら、観光マネジメントを学び観光の影響を考察する中で、観光に対する姿勢が変わっていきました。観光の裏側には何かを強制されている人や排除されている人があるのでは、とシビアに考えるようになりました。そして、私が留学前に思い描いていた観光の理想と現実の違いを実感し、自分の視野の狭さに気づくことができました。この経験が私の就職活動につながりました。

ヨーロッパ旅行を楽しんでいましたが、いよいよ新型コロナウイルスが私の留学生活を変えていきます。2020年2月末、フランスの友人を訪れました。その時すでに、新型コロナウイルスがアジアで流行していることがヨーロッパにも広まっていました。友人と街を歩いていた時、現地の人から差別的なことを言われました。また、私が住んでいたオランダの町でも、子どもたちがアジア人を見て手で口と鼻を覆う仕草をしているのを見て、ついに除け者になったのかと思ったことがありました。

フランス最後の夜、日本大使館からオランダで感染者が1人確認されたという知らせが届きました。「もう駄目かもね。日本に帰る準備をしよう」と友人と話したことを覚えています。

それから、1週間もしないうちに、オランダの感染者数は勢いよく増え、3月中旬には

1日の感染者数が千人単位になっていました。新型コロナウイルスの猛威は私が住んでいた地域にも到達し、スーパーでは人にぶつかっただけで怒鳴られたり、後ろからアジア人とののしられたりするようにもなりました。差別を受けるのは平気でしたが、帰国するのか滞在を続けるのかどちらとも連絡が来ず、帰国するフランスやドイツの友人から連絡を受けて明日は我が身の思いで生活する方がつらかったです。そのため、早急に帰国しようと連絡を受けた時は、宙ぶらりんの状態から抜け出せたと安心しました。

しかしながら、帰国の準備は大変で、気持ちの整理がつかないまま時間は過ぎていきました。帰国便の日付変更はカスタマーセンターが混雑しておりスムーズにできず、なんとか帰国便チケットを買っても搭乗便のキャンセルの可能性があるため安心できない。帰国日が分からないと、住民票の手続きができない。進行中の授業は？奨学金は？卒業論文は？日本での就職活動は？というように、何も確定せず、計画していたことも白紙となり、毎日ストレスを感じていました。また、予想はしていたものの、現地の友人との別れはとてつらく、落ち込んでばかりでした。

これまで、新型コロナウイルスによって自分が苦労した経験を述べてきましたが、この予測不可能な事態を乗り越えられたのは、友人と友人の家族や大学の先生らのサポートが最初から最後まであったおかげです。ここでは書き切れないほど助けてもらいましたし、支えてもらいました。オランダ最後の時間を楽しく過ごすために、現地の友人の家に招待してもらったり、パーティーをしたり、映画を見たりと、最後の最後まで楽しい思い出であふれています。

トラブルもなく帰国しましたが、帰国から1か月は特に何も行動せずにいました。というのも、留学後の計画がガラリと変わり、自分でも気持ちの整理ができなかったからです。全てがオンラインになり、友人との交流が減り、自分が今どこにいるのかが分からなくなりました。他の学生の就職活動は順調なのだろうか、自分は置いてきぼりになっているかもしれないとも感じました。

先にも述べましたが、私は観光業で働くことが目標でした。これは中学生のころから決めていたことで、高校を選んだのも、大学を選んだのも、国際交流や海外インターンシップに励んだのも、留学先を選んだのも、全てこれのためでした。しかしながら、観光業は新型コロナウイルスの大打撃を受けています。ただでさえ狭き門であった観光業は、より難しい業界になり、新卒を採らない企業が続々と増えています。就職活動中も、採用延期や中止の連絡が多く、とても落ち込みました。私の強い思いの反面、就職の可能性は日々低くなっていきました。

何度も何度も考えた結果、私は観光でない業界を選択しました。自分では諦めるの

ではなく、回り道をする感覚でいます。その業界を選ぶ際、先に述べた旅行で感じた違和感を解決できるかどうかを基準にしました。その業界で知識と経験を積み、将来は自分で観光プロジェクトを計画したいと考えています。過去を振り返ると、当時は直感で行動していたのにもかかわらず、そこには観光という軸が常にありました。全ての行動に関連性があり、無駄ではなかったと分かりました。悩んだ末に決めた進路が私の目標にどう影響するかは分かりませんが、必ず意味のあるものになるだろうし、そうしていくことが次の私の目標です。

新型コロナウイルスは間違いなく、私の生活を変え、将来も変えました。このように変化する社会で成長していくには、自分の軸を理解する必要があります。就職活動は軸を考えることから始まりますが、自分の軸は日々の生活にも生きてきます。自分の軸を理解していれば、広い視野で柔軟な考え方ができ、常に最善の選択ができます。軸が定まっていれば、どのような決断や行動も自分の糧になります。このように、新型コロナウイルスによる留学中止とその後の1か月間は、私にとって再出発の準備期間であり、意味のあるものだと感じています。



7か月間のアメリカ・ ニューハンプシャー留学を終えて

教養学部ヨーロッパ・アメリカ文化専修アメリカ研究専攻4年

いえだともよ
家田知世

自己紹介

2019年8月から20年3月まで、アメリカ合衆国のニューハンプシャー大学 (UNH) で交換留学をしていました。本来であれば20年5月までアメリカに滞在する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナ)の影響で帰国を余儀なくされてしまった一人です。現地での経験は、自身のFacebookや埼玉大学の学生限定の留学報告会などでも伝えてきましたが、ここで改めてより詳細に振り返ることで、同じ境遇の人々と気持ちを共有できればと思います。

1月 遠い世界の話?

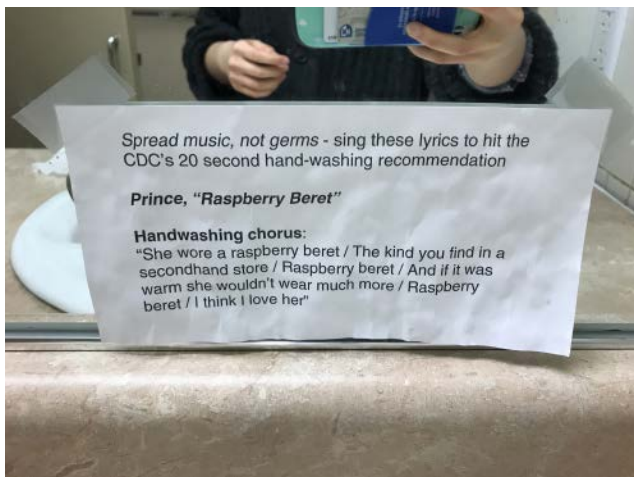
新型コロナに関して報道され始めたのは1月ごろだったと思いますが、その時は全くと言っていいほど危機感を持っていませんでした。長い冬休みをシカゴで満喫し、新学期に向けてまた頑張ろう、と気持ちを新たにしているころでした(アメリカでは基本的に8月~12月が前期、1月~5月が後期というスケジュールです)。2か月後に環境が激変していることなんて、(恐らく私以外のどの学生も)想像もしていなかったと思います。

2月 まだまだ実感なし

日本で感染者が出たニュースも届き始め、寮で学生同士が中国のニュースを話題にする姿も時々目にしていました。しかし、自分の中ではまだ他人事のような気がして、かなりのん気に過ごしていたように思います。授業の課題が大変で頭がいっぱいでしたし、残り3か月となった留学を悔いなく過ごそうと、いろいろなイベントに参加していました。ニューハンプシャー州では大統領選挙の予備選挙が2月にあり、当時の候補者バーニーサンダースが大学で演説をしたのを見に行きましたが、今ではあり得ないくらいの“3密”状態で、大学内も選挙ムード一色でした。

3月上旬～春休み

この辺りから状況が一気に変わっていきます。隣のマサチューセッツ州で感染者が増えてきたり、ニューハンプシャー州でも大学外とはいえ感染者がちらほら出始めたりしました。大学では集団でのイベントごとにまだ制限がありませんでしたが、人と話す時はなんとなくコロナについての話題が出るのが普通になっていました。日本のことについて聞かれることもあり、全国の学校が一斉休校になったことや、埼玉大学の卒業式が中止になったことなどを伝えていました。UNH ではあらゆるトイレに手洗いを促すポスターが掲示され始めました。



トイレ内に貼られたメモ。20秒間の手洗いを推奨するため、20秒で歌い終わる歌の歌詞を載せている。



同じくトイレ内で、手洗いの重要性を訴えるもの。キャンパス内のあらゆるトイレに同じものが張られていた。

アメリカの大学では、3月中旬に1週間程度の春休みが設けられます。春休み直前は、大学からさまざまな発表が立て続けに起こりました。まず、「春休み中マサチューセッツ州に何らかの形で滞在した場合は、春休み後2週間程度はキャンパス内には戻らない」というルールが作られました。これが学生から猛反発を食らいます。UNHにはマサチューセッツ州出身の学生が多く、春休みには当然彼らは実家に帰省するからです。SNSを通じて多くの学生が声を上げたことにより、「春休み後2週間、全ての学生、教員がオンラインで授業を行う」というルールに変更されました。さすがアメリカ、というべきか、若者が積極的に主張する文化が根付いていることを改めて感じました。

春休み直前の授業内でも、コロナの話題が多く出されたのですが、この時はまだ楽観的というか、コロナを怖がり過ぎることに否定的な意見も多く混ざっていたと記憶しています。「致死率はインフルエンザよりも低いらしい」、「お店の消毒液が買い占められて全く売っていなかったけど、みんな焦り過ぎだと思う」、「メディアが恐怖をあおっている」などなど、全て間違いとは言えませんが、

4月、5月のアメリカだったら果たして同じ意見は出たでしょうか……。かくいう私も、「2週間だけ寮に閉じこもってオンライン授業をしたら元に戻れるのだろう」というなんとも楽観的な考えをしていました。自身の親からLINEで日本でのマスク買い占めについて聞いていたので、そもそも5月に留学を終えて日本に帰っても大丈夫なのか?なんて考えていたこともありました。

補足しますと、寮に住んでいる学生は、長期休暇の際は寮を出なければならず、学食も開きません。留学生などがやむを得ず寮に残る場合は、申請して追加料金を払う必要があります。しかし、今回は新型コロナに配慮して、どの学生も無料で寮に残ることが許可され、学食も1か所だけ時短営業で開くことになりました。食事の面で親に心配をかけずに済んだのは、ありがたかったです。

激動の2週間 突然の別れ

ここから急激に状況が変化していくので、細かく記述していきます。

3月14～17日

春休みが始まり、寮でリラックスしたり友人と出かけたりする日もありましたが、この時はまだ春休み後に授業を再開できると信じていたので、通常のリーディング課題にも少しずつ取り組んでいました。学食では普段、バイキング形式で自由に食べ物を取りますが、この時はスタッフに欲しいものを伝えて容器に詰めてもらい、自室に持ち帰って食べるスタイルを取っていました。マスク着用は求められていませんでしたが、ソーシャルディスタンスは意識していました。

3月18日

この日大学から、「今学期は全ての授業を対面で行わないので、30日までに寮を出なさい」との連絡が入ります。すぐには信じられませんでした。寮を出る？ つまり、日本に帰る？ こんなに急に？ 1人で部屋にいるのがすごく不安で落ち着かなくなり、寮の共有スペースに降りて行って、何を話すでもないけれど他の学生がいる場所でしばらく過ごしました。少し落ち着いて、親とも連絡をとって、ああもうとにかく帰国の準備をしなければ、と気持ちを切り替え始めました。しかし、本当に大変だったのはこの後だったのです。

3月19日

朝から急いで30日発の飛行機を予約しました。ギリギリの日付にしたのは、できるだけ長くUNHにいたかったからだと思います。そして、履修している授業の教授、UNHの国際室、ボランティアをしていた学童クラブとフードパントリー、埼玉大の国際室とアメリカ研究の先生方へとにかくメール、メール、メール。このパニックの中できっとみんなが大忙しだったのは間違いないですが、特に授業をどうすればいいのかを早く相談したくて、なかなか返信がないことに焦りを覚えました。

その日の夕方、UNHから2度目の連絡。「30日ではなく22日までに寮を出なさい」とあって、「……え?」。

この時の気持ちは一言では表せません。飛行機取り直さなきゃ、荷物もまとめなきゃ、あと3日しかない、どうしてこんなに急に……。悲しいというより、イライラの方が強かった気がします。春休み中だったので、寮にいるほとんどはアメリカに家のない留学生。せめて最初から22日を提示してくれたら良かったのに。UNHに来てから人種差別されたと感じることはなかったのですが、最後の最後でこの仕打ちは、留学生をないがしろにしていることではないかと感じました。

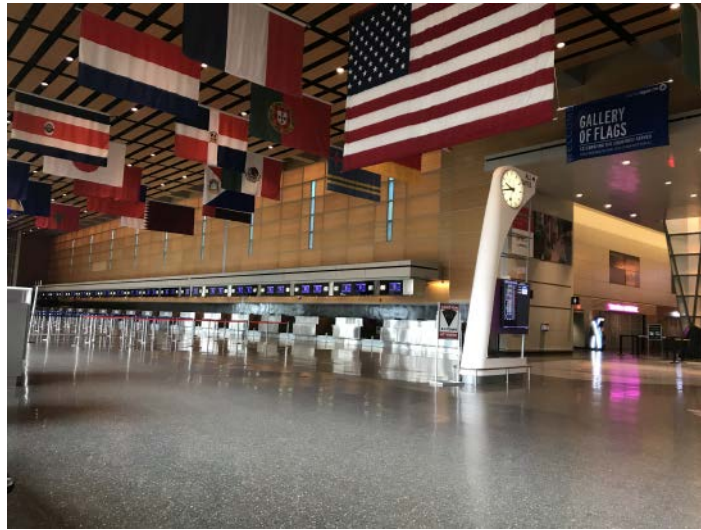
結局、余計な手数料を払って飛行機を変更しました。22日は満席だったので、23日に。許可を取れば30日まで滞在できましたが、気持ちとしては「早く帰って落ち着きたい」に変わっていました。

3月20～22日

帰国の準備をしつつも、あまりあくせく動き回ることもなく、ゆったり過ごしました。現地の学生は基本的に帰省していて、不要な接触をしないように大学から言われていたので、しっかりとお別れができたのは数人のみでした。留学当初から仲良くしてくれていた友人が(本当はあまり良いことではないけれど)家に招待してくれて、友人数人とご飯を食べたり外を散歩したりして、本当に楽しく過ごしました。

3月23日 帰国

同じ埼玉大からの留学生2人と同じ飛行機で帰りました。もちろん納得のいく終わりではなかったけれど、今はSNSで簡単に連絡が取れる時代なので、そこまで悲しい気持ちにはなりません。とにかく無事に帰国できて良かったです。



帰国日のボストン空港。手荷物を預けるカウンターは数か所しか開いておらず、搭乗客以外はほとんど人がいなかった。

帰国後オンライン授業の苦痛

帰国して休む間もなく、オンライン授業が始まりました。時差を心配していましたが、実際リアルタイムで授業を受けたのはほんの数回だけで、基本的に締め切りまでに課題を提出すればいいように先生方がアレンジしてくださったのがありがたかったです。しかし、課題はとても大変でした。内容そのものというより、「実家で、友人にも会えず一人で勉強している」という状況が本当にしんどかったです。一生懸命やっているけれど、集中力が続かずに時間だけが過ぎてしまいます。グループワークもありましたが、オンラインだけではコミュニケーションもうまく取れず、出来もあまり良くなかったです。ある授業で「コロナに関して感じることを自由に書いて」という課題があったのですが、他の学生も体調が優れないとか、不安に感じるといったコメントがあり、私以外にも大変な思いをしている人がたくさんいると知れたのは良かったです。

UNHでの課題を全て終えた後、すぐ埼玉大の授業に合流し、バイトと就活も始めたので、夏休みまでノンストップで活動してきたのは、今振り返ってもすごく頑張ったと思います。

最後に

ここまで淡々と出来事をまとめてきましたが、やはり最後まで完全な形で留学を終えられず、残念な気持ちはあります。あと1か月半あれば、もっといろいろな経験ができたかもしれません。しかし、そこまでの約7か月でとてもいい経験ができたことも事実です。今後いつ留学が再開できるかわかりませんが、さらに多くの埼玉大生が国際交流を経験して、たくさんのことを学んでくれるといいなと思います。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

ポーランド・ ワルシャワ留学からの帰国

教養学部ヨーロッパ・アメリカ文化専修ヨーロッパ文化専攻 4年

なかはらかずき
中原知希

1. はじめに

私は、ポーランドの首都ワルシャワにあるワルシャワ大学に2019年9月から1年間の留学予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、20年4月2日に帰国しました。ここでは、私が留学中に新型コロナウイルス（以下、新型コロナ）を意識し始めた20年1月から帰国までの流れについて記します。

ワジェンキ公園のショパン像。期間限定で屋外ピアノ生演奏を無料で聴ける、人々の憩いの空間。



2. コロナを意識し始めたころ（2020年1月下旬－2月上旬）

2.1 1月下旬

まず、私が新型コロナの存在を意識し始めたのは2020年1月です。当時は中国から感染症が次第に広がりつつ、ヨーロッパの観光都市ではやり始めたか否かくらいでした。まさかアジアから遠いヨーロッパで感染が拡大し、パンデミックが発表されるとは夢にも思いませんでした。また、私は2月初旬にイギリス・ロンドンへの旅行を計画していました。この旅行について、1月下旬に家族に話しました。すると、その旅行をやんわりと反対されました。やはりこの時点で、中国に近い日本に住む家族とそこから遠い場所で暮らす私との間にはギャップがありました。しかし、私は旅行に出かけました。

2.2 ロンドン旅行

ロンドン旅行をするにあたって念のためマスクを持ち、できる限り人と関わらないようにと心して行きました。ロンドンの空港の様子は、概して普通でした。マスクをしている

職員は1人もいませんでした。しかし、医療用のようなマスクをした旅行客を数人見かけました。海外でマスクをしている人を減多に見かけないので、コロナウイルスが着実に広がりつつあることをその時実感しました。幸い、この旅行は無事に楽しい思い出とともに終わることができました。ロンドンを出国後、ポーランドに入国する際に特別な入国検査（検温など）はありませんでした。



2月初旬イギリス旅行中のバッキンガム宮殿前。新型コロナを意識している人は少なかった。

3. ポーランドでのコロナ感染拡大を認識（2020年2月下旬－3月上旬）

3.1 2月下旬

セメスター切り替えの休暇が終わり、2月下旬からワルシャワ大学ではサマーセメスターが始まりました。ワルシャワでの生活や大学の授業に完全に慣れたころ、新たにサマーセメスターからポーランドにやってきた留学生との交流が増え、曇天が続いたワルシャワの天気も晴れの日が多くなり、いよいよ迎える留学後半戦に私は心を奮い立たせていました。

その一方、日本で新型コロナの流行が顕在化し、卒業式、ライブといった各イベントの中止、また小中学校の登校も禁止されたことを知りました。このような状況を知り、日本や中国などアジア地域は危険な状況にあると理解しました。また、ポーランドの隣国であるドイツでも感染者が増えてきました。そのため、新型コロナが、刻一刻と私の留学先に近づいてきている実感はありました。それに加えて、ワルシャワに来る観光客には中国人が多いイメージを持っていたため（ワルシャワ大学の正門を観光する中国人団体客を頻繁に目にしていたので）、単純に「怖い」と思っていました。しかし、まだ新型コロナがポーランドではやり始めている実感はなく、アジア諸国、ヨーロッパの人気観光諸国で感染拡大している感覚が強かったです（これは私の感覚であり、しっかりポーランド当局のニュースを見ていれば、違う感覚を持ったかもしれません）。



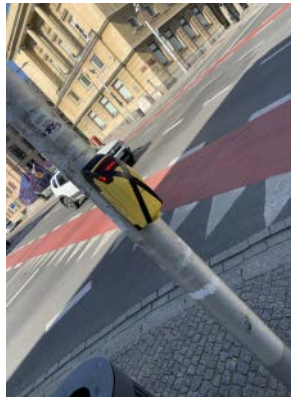
観光名所のワルシャワ大学の正門やショパンの心臓が眠る教会が面し、旧市街に通じるワルシャワきってのメインストリート「Nowy Swiat（ノーヴィ・シフィヤト／新世界通り）」）。普段は観光客や学生でにぎわっているが、コロナ禍で人気なくなった。

不要不急の外出が命じられたワルシャワでは、バスの降車時にドアを開けるためのボタンが押せないようテープが貼られ、バス停ごとに自動でドアを開けていた。





バスの運転手席付近の座席やドアの使用は禁じられた。



横断歩道を通行時に押すボタンにもテープが貼られた。



スーパーマーケットのパン売り場。以前は、ビニール袋や素手でパンを取るスタイルだったが、コロナ禍になってからはパンが個装されるようになった。



レジ前の陳列棚の様子。黄色い表示は、安全のために人と人との間隔を1mあけるよう注意している。その横に置かれた小瓶は、消毒用に売られているアルコール度数が高いお酒。

3.2 3月上旬

3月に入っても私の感覚は変わりませんでした。初旬にオランダに留学している日本人の友人から連絡がありました。「3月下旬にオランダに遊びに来ない？ イタリアに留学している友達が強制帰国で暇なんだよね」という連絡を受けました。私はあまり迷うことなく、オランダ旅行を決意しました。それから数日後にポーランドで次々と自粛制限がかかるとは夢に思わず……。

3月10日。晴天の午後、私はいつも通りエジプト考古学の授業を受けに、大学に行きました。普段通りパワポを使った授業が展開されました。しかし、最後に教授から一言。「みなさんご存知の通り、コロナのため、明日から授業がなくなるかもしれません。けれど、私の授業は前もって言っている通り、各々の研究を進めておいてください」私は耳を疑いました。青天の霹靂のごとく、「明日から授業が急になくなるなんてありえない」と思いました。

授業終了後、バスに乗って寮に帰宅しました。心のどこかで「授業は本当になくなるのかな……」と思いつつ、次の日の授業の課題に取り掛かりました。そして、ふとメールを見ると、ワルシャワ大学の国際室から「明日から授業がない」ことが知らされました。

あぜんとしました。私はルームメイトや友人にメールをし、これが事実かどうか確認しました。もちろん事実でした。無気力に急に襲われました。その日の夜、翌日の授業を担当する先生から次々と連絡がありました。「明日は授業がありません」と。私は授業がないことをいったん受け入れ、「またすぐに授業が再開されるだろう」と気持ちを切り替えました。

3月13日。大使館から連絡が来ました。「明後日から国際便が停止するという発表がポーランド政府からありました」と伝えられました。私の見間違いか、書かれた内容が信じられず、何度もメールを読み直しました。突然、ポーランドに缶詰め状態になったことを突き付けられました。2週間の国際便の停止。ポーランドでの感染拡大という現実をさらに実感しました。

それと同時に、留学中に知り合った友人が、今デンマークに旅行をしていることが頭をよぎりました。帰国日は、その国際便が停止される、まさにその日でした。とても心配でした。彼は、なんとか帰国路を変更し、国際便停止日に日付が変わろうとするそのギリギリの時刻にポーランドに無事帰国しました。ただ、ポーランドの空港に到着すると、しばらく飛行機から降りることを許されず、物々しい防護服に身を包んだ人が乗客一人一人に検温をしたそうです。また、乗客の1人を検温した時、「ピピッ」と高音を響かせると、その空間が一気に張り詰めたというとても緊迫した状況であったことを話してくれました。

4. 帰国の決意と難航 (3月下旬)

4.1 3月下旬

授業の中止、国際便の停止、外出時はアジア人に対する嫌がらせの可能性など、不安要素の多さに、私はのやる気は日に日にそがれていきました。このままではいけないと思い、たまに寮の友人と一緒に料理をしたり、公園で散歩をしたりしました。

しかし、その状況もすぐに変りました。寮長から、共同キッチンで必要以上に近づいて会話することはやめるよう指示され、政府の通達により、むやみな外出が禁止され、ペットの散歩や生活必需品の買い物など必要最低限の外出に制限されました。寮から外出することもポーランドから出ることも封じられ、必要最低限の外出も新型コロナに気を付けつつ、コロナに対する鬱憤^{うっぶん}をぶつけられる可能性があるという頭に入れて行動しないといけないという不安感も重なり、とても混乱しました。

4.2 帰国の決意

私が帰国を決意したきっかけは、1週間たっても授業が開始する予兆がなく、先にも述べた不安感があったからです。また何より私自身に自己免疫系の持病があり、万が一にでもポーランドで新型コロナにかかったことを想像するだけで、自身の身の危険性や、家族をはじめ友達にもたくさん迷惑をかける可能性が高かったためです。ささいな風邪でも持病の症状悪化の引き金になりかねない私にとって、危険を冒してまで、心配をかけてまでポーランドに滞在する選択肢はありませんでした。

私が帰国を決意した時のポーランドの危険度レベルは2でした（外務省が出している各国の危険度レベル）。埼玉大学の方針では「危険度レベル3＝強制帰国」で、レベル2では帰国は任意でした。そこで、私は帰国を決意し、その旨を両親、埼玉大学の国際室、教授に相談しました。みなさん、私の意思を尊重し、留学を中止して帰国することに同意してくれました。ただ、帰国の決意は簡単にできても、実際に帰国することが難航するとは思っていませんでした。

4.3 帰国の難航

国際便停止の連絡以後、在ポーランド日本大使館からは毎日のように連絡が来ました。その中でも多かったのが、日本への帰国の仕方についてです。大使館からのメールには「ポーランドから出国し、日本へ帰国するには隣国のドイツへ行く必要がある。しかし、そこへの道はワルシャワというポーランドの東に位置する都市にとっては遠い。いかなる公共交通機関も通常通り、運航しているかもわからず、国境を越えるその道は常に大混雑している。しっかり飲料、食糧を持ち、長時間覚悟をしていくように」と書かれていました。

そのようなこと言われも、短期留学をしている学生の私たちにそのような帰路をたどれる自信はありません。帰国したくても、帰国を命令されても、私たちにはどうしようもない現実がそこにありました。

そのような状況の中でも、ワルシャワ大学に留学している日本人同士で連絡を取り合い、帰路を見出そうと努力をしました。日本人留学生の中には、ワルシャワに残ることを決意する人もいれば、大学から強制帰国を命じられた人、新型コロナウイルスのために毎月支払われるはずの奨学金が一方的に中止されてやむを得ず帰国をする人、単にコロナが怖く帰国をしたい人などさまざまでした。

各々持っている情報を交換しながら、どのようにして帰国するか話し合いました。そして、大使館にチャーター便の手配を依頼する請願書を連盟で送るなどしました。また、

私の場合、当初は2週間の国際便停止であったため、3月29日に日本行の航空券を取得していました。しかし、その飛行機が飛ぶのか分からないので、飛ばなかったら缶詰めでもいいかと腹をくくっていました。

結果的にポーランドでの国際便の停止は6月まで延長されましたが、4月1日に1回限りで日本行きの便が飛び、それに搭乗して帰国することができました。この1便が飛んだ理由は、ポーランド政府が日本在住のポーランド人を帰国させるために手配し、そのチャーター便をポーランドから日本に飛ばす際に日本に帰りたい人々をそこに乗せることを許可してくれたからです。本当に運が良かったと思います。私は、帰国することをほぼ諦めていた分、とてもうれしかったです。

5. 帰国とその後 (3月下旬 - 4月1日)

5.1 帰国直前のワルシャワ

当時のワルシャワの雰囲気は、極めて静かでした。バスやトラム内のあらゆるボタンは「×印」のガムテープが貼られ、運転席の座席は封鎖。街の中心に位置するズオティータラシーというショッピングモールは、4、5か所あった入り口は1か所に制限され、地下1階の食料品店以外の店は全て閉鎖されていました。食料品店の入り口には、消毒液、ビニール手袋が用意され、店員も見慣れないマスクをしていました。さらに、レジ付近の陳列棚にはアルコール度数が極めて高いウォッカ「スピリタス」が敷き詰められていて、「これで消毒しろ」といわんばかりでした。

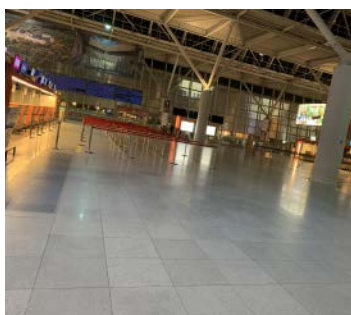
寮も閑散としていました。私が帰国をするか否かで気を取られている時に、ヨーロッパ出身の留学生は次々と帰省や帰国をしていました。そのため、寮にいる留学生はアジアや南米などの簡単には行き来ができない地域の人が多いように感じました。隣の寮では、新型コロナに感染した人がいるという噂もありました。また、寮の通りを挟んで向かい側にある病院は、いつのまにか新型コロナ対応病院へと変わりました。そのため、四六時中、深夜にも救急車のサイレンが鳴り響き、サイレンを聞かない日はなかったように記憶しています。医療ヘリが飛んでいるところも見ただけでも、ただただ不安な気持ちが増長されました。

5.2 帰国日

4月1日。いよいよ帰国。私は、同じく帰国する日本人の友人と最後に寮周辺を散歩しました。近くにある公園では、いつもなら散歩する人が多くいるはずなのに、一人も見かけず、パトカーや警察が見回りをしていました。ドラッグストアやスーパーでは入場

制限が行われ、ポーランド人は律儀に一列に店外で順番待ちをしていました。寮に帰宅すると、寮母さんがアルコール消毒（ただの酒）を私たちの手に吹きかけました。

夕方になって、寮を後にし、空港へバスで向かいました。バス内はもちろん、人がほとんどいませんでした。空港に着いて空港内に入っても人気がなく、薄暗い雰囲気、目に付く人ばかりには日本人しかおらず、日本語が響くターミナルの雰囲気は異様に感じました。機内は、隣の座席を空席にするなど特別な配慮はなく、ほぼ満席のようでした。ただ、客室乗務員はマスクをしていました。無事飛行機に搭乗できた私は、ただただほっとした気持ちで、成田空港に着くまで熟睡でした。



19時ごろのワルシャワ空港内。人が少なく、必要最低限のライトが点灯しているだけで、寂しい雰囲気だった。



帰りのチャーター便内で提供された梅のソーダと2ℓの飲料水。丁寧な配慮が感じられた。

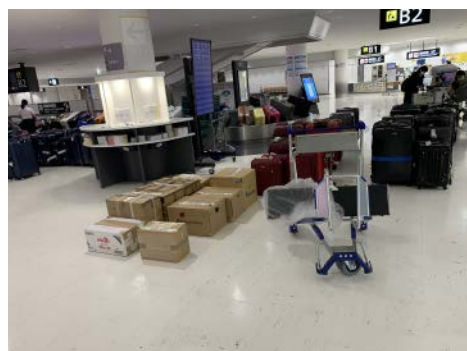


提供された機内食。おにぎりを目にして自然と笑顔になり、優しさを感じた。

成田空港に着陸するや否や、ある紙が配られ、各々の帰路の手段や2週間の滞在先について書くよう指示されました。記入が終わり次第、飛行機から降りました。すると、検疫、入国するまでに大行列がありました。他国からの便も同時に到着した模様でした。距離を取るような指示はなく、その列にソーシャルディスタンスはありませんでした。30分ほど並び、ポーランドは危険度レベル2であったからかPCR検査なしに検疫をスムーズに抜け、スーツケースを受け取って空港外へ出ることができました。私は両親に迎えに来てもらい、半年ぶりの帰宅をしました。



飛行機を降りた後、税関までは長蛇の列ができていた。ソーシャルディスタンスの呼びかけはなく、間隔をしっかりとらずに並んでいた。



空港職員がスーツケースを色別、種類別に並べていた。緊急帰国のために荷物の整理が追いつかず、段ボールに入れられた荷物も多くあった。

5.3 最後に

このようにして、私は無事にポーランドから帰国しました。新型コロナのせいで留学期間が短くなってしまったことは、大変悔しいです。しかし、逆にパンデミックという世界的な重大な出来事を日本国外で体験できたことは貴重だと感じています。どうにか帰国しようと画策したり、最悪の事態になって海外に缶詰めになっても生きていけると思えたりしたことは自身の成長を実感しました。また、日本をはじめ諸外国の新型コロナに対する動向も俯瞰^{ふかん}して見られたという点でも、学びは大きかったです。総じて、大変な思いをしたことは事実ですが、貴重な経験をしたという感覚も大いにあります。

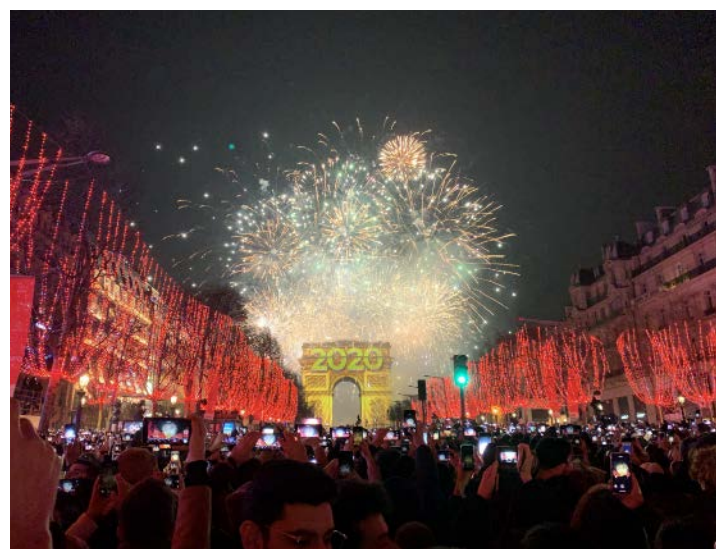
コロナ後の グローバル活動を見据えて

教養学部グローバル・ガバナンス専修国際関係論専攻4年

なぐら よしき
名倉佳輝

私は、2019年9月から20年3月まで、フランスにある Sciences Po Lille（リール政治学院）に留学していました。留学期間はもともと約1年の予定でしたが、ある問題が発生して半年ほどになってしまいました。ある問題とは、COVID-19がフランスで拡大してしまったことです。COVID-19によって突然終わってしまった留学生活ですが、振り返るとさまざまなことを考え、経験し、成長できたと感じています。そこで今回、COVID-19が広がる前の留学生活と広がってからの留学生活を振り返りながら、帰国後に考えたことや感じたことを書き残したいと思っています。

そもそも、なぜ私が留学したかという、「世界中に友達をつくり、さまざまな価値観や考え方を理解・共有したかった」からです。海外旅行では現地の人や他の国籍の人と友達になる機会がほとんどありませんが、留学をすればさまざまな国籍の人と関わるすることができます。私は、これこそが留学の醍醐味だいごみだと考えています。そのため、留学中はとにかく多くの人と関わり、フランスについてだけでなく、他の国についても理解しようと努めました。



パリでの年越し。人生で初めて地元以外での年越しを経験した。プロジェクションマッピングで盛り上がり、年が明けてから上がった花火に感動した。

こうした目的を持って臨んだ留学生活ですが、COVID-19が広がる前の生活は上手くいかないことの連続でした。主に、友達づくりと現地での生活、そして勉強の3点で実行錯誤する毎日でした。

まず、友達づくりに関してですが、留学が始まった当初は、普通に過ごしていれば友達がたくさんできるだろうと楽観的に考えていました。しかし、現実はそうではありませ

んでした。Facebook でイベントを探して友達をつくりに行ったり、あまり上手くない英語でも積極的に話しかけたりするなどして、自ら動くことでなんとか友達をつくることができました。友達づくりが軌道に乗ってきたころには、既に留學生活も後半にさし掛かっていたため、もっと早くから行動していればと後悔しました。

次に、現地での生活に関しては、留學前の準備が十分でなかったせいで出発してから必要なものや書類がたくさん出てきて、入国後の手続きがなかなか進まなかったり、生活に苦勞したりしていました。最終的には、親に国際郵便で荷物や書類を送ってもらうなどしてなんとかなりましたが、迷惑をかけてしまって申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

加えて、私は留學中、シェアハウスをしていましたが、語学力が乏しかったり、コミュニケーションを取ることに少々奥手になっていたりしたこともあり、なかなかハウスメイトとなじめず、最初は生活にかなり苦勞していました。次第にお互いのことを理解するようになり、上手く生活できるようになりましたが、最初からもっと積極的に話しかけて相手のことを理解しようと努めるべきだったと反省しています。

最後に、勉強に関しても出発前の勉強不足でなかなか授業についていけず、苦勞しました。たいていの人は、出発前にフランス語と英語をしっかり勉強し、フランスや EU の事情についても事前に調べていると思います。しかし、私はこうしたことをやっていたため、留學が始まった当初は議論に参加できないことが多々あり、苦勞していました。授業後に分からない単語や歴史について調べたり、語学の学習を続けたりすることで、第 1 セメスターが終わるころにはなんとか少しだけ慣れることができましたが、事前準備がしっかりできていればこんなに苦勞することはなかったのではないかと思います。



ブリュッセルにある欧州連合本部にて。授業の一環で訪れて普段は入れないところを見せてもらったり、職員の方から直接話が聞けたりと貴重な経験ができた。



ロシア人が留学生を集めて 3 月に立ち上げたダンスサークル。この頃から COVID-19 が拡大し、写真を撮った時が最初で最後の活動に。

一方で、楽しかったこともあります。フランスやフランス以外の国の文化と日本の文化の違いを知ることができた点が、一番良かったです。たとえば、ハンガリーやオーストリアに行った際、現地の友達にオススメのお店や場所を紹介してもらい、現地の文化などを感ずることができました。

また、友達とバーに行ったりパーティーをしたりした際、日本人とヨーロッパの人のお酒に対する価値観や、あいさつの仕方の違いを知り、とても興味深いと思いました。このように、COVID-19が広がるまでは、旅行や人と関わることを通して日本と違う文化や価値観を直接感じて、大変貴重な経験ができました。

次に、COVID-19がフランスで拡大してからの生活を振り返ると、悔しい気持ちでいっぱいでした。COVID-19の心配が出てきたのは20年2月ごろで、その後もヨーロッパやフランスにおけるCOVID-19の状況は悪化の一途をたどり、3月にはロックダウンされることになってしまいました。

こうした状況において悔しいと思った理由が2つあります。1つは、今後やろうと思っていたことが全てできなくなってしまったから、もう1つはそれまでの街の雰囲気や人の態度が変わってしまったからでした。COVID-19の心配が出てきた2月ごろは、留学が始まって半年ほどが経ったこともあり、最初のころより留学生活に慣れ、もっといろいろなことをやってみたいと思っていました。また、第2セメスターから留学を始めた友達もでき、新しい活動を計画していた時期でもありました。

こうした中、感染リスクを避けるために行動が徐々に制限されたり、ロックダウンされて人と会えなくなったりしてしまいました。留学中にやりたいことのほとんどを3月以降に計画していたため、それらができないまま帰国することになってしまって、大変つらかったことを今でも覚えています。

2つ目のそれまでの街の雰囲気や人の態度が変わってしまったことについては、COVID-19の影響でにぎやかだった通りから人が消え、街の人の中にはアジア人に対して「コロナだ」と言ったり、わざと咳をしたりして差別的な行動を取る人がいました。

こうしたことならまだ良かったのですが、夜暗い中での帰宅途中、人通りの少ないところで中国人かどうか聞かれて命を狙われそうになり、



ロックダウンが開始されてからリアルで一番にぎわっていた広場「グランブラス」から人が消え、警察が監視するように。街並みが一変して、とても悲しい気持ちになった。

街に買い物に行くのが怖くなったこともありました。

このように、自分には何も罪はないのに今までと明らかに違った態度を取られたり、歩いていて楽しかった Lille (リール) の街並みも閑散とした街に変わってしまったりしてとても悲しかったです。



ロックダウン前日、食品の買いだめをしようとスーパーに行く人が増加。感染拡大を防止するために中に入れる人数が制限されてしまい、入るまでに1時間待つことに。



食品の買いだめをする人は後を絶たず、スーパーから食品が消えることに。私自身生活に困ってしまったが、ハウスメイトと助け合ってなんとか乗り越えることができた。

これまで、COVID-19 が広がるまでの留学生活と広がってからの留学生生活を振り返ってみましたが、どちらも大変な思いをして過ごしていたことは確かです。しかし、一つ大きな違いがあると言えば、人と関わって楽しめたかどうかです。COVID-19 が広がる前は、自分の準備不足で上手くいかないことの連続でしたが、それでも友達と会って話をしたり、旅行や買い物をして楽しんだりすることができ、なんだかんだ充実した日々を過ごせていました。

COVID-19 が広がってからは、いくら今後の計画を立てても人と会うことが許されず、そうした計画を実行することができませんでした。ましてや、友達にさよならを言えずに帰国しなければならないことになってしまい、とてもつらい気持ちでした。

こうしたコロナ禍での留学の経験を通して、次の3つの大切なことを学びました。

1つ目は、「準備の大切さ」です。COVID-19 が広がるまでの間、出発前の準備不足が原因で生活や勉強が上手く軌道に乗らず、試行錯誤する毎日でした。当時は、そのうち留学生活も軌道に乗ってやりたいことができるとばかり考えていました。

しかし、COVID-19 により、その日はやって来ずに終わってしまいました。この経験から、出発前に準備をしっかりとって留学をスタートさせていれば最初からいろいろなことに挑戦でき、もっと満足のいく留学生活を過ごせたのではないかと思います。

2つ目は、「積極的な行動の大切さ」です。最初の方で述べたように、私は世界中に

友達をたくさんつくり、さまざまな価値観や考え方を理解・共有したいと思い、留学することにしました。しかし、肝心な人の繋がりを最初は上手く作ることができませんでした。その原因は、自分から積極的に話しかけに行ったり、イベントに参加したりしなかったことです。自分の語学力がいくら乏しかったとしても、まずは行動しなければ何も変わりません。そのため、早い時期から、友達をつくるために積極的に動いていれば、こんなに苦労することはなかったと思っています。

そして3つ目は、「状況変化に応じて気持ちを切り替えることの大切さ」です。私は帰国してからなかなか気持ちが切り替えられず、何も考えられない状況が続きました。特に、留学生活に慣れてちょうど楽しくなってきたところでの帰国だったことが、更に追い打ちをかけました。しかし、帰ってきてからも就活などやるべきことがたくさんあったため、次の目標を立ててそれに向かって努力しなければなりませんでした。

私は、また海外に行っているいろいろな人と関わったり、留学先で出会った友達と再会したりしたいと思っています。また今後、今回のように留学する機会がなかったとしても、ビジネスやボランティアを通して海外と関わりたいと思っています。もちろん、こうした自分のやりたいことがいつできるようになるかは分かりません。しかし、その時のために、今回の留学を通して学んだことを生かしてすぐにでも目標を立て直し、1日でも早く準備を始めて積極的に行動していかなければならないと考えます。

最後に、私のように留学が中断になってしまった人、留学に行けなくなってしまった人、その他日本で国際交流に携わることを楽しみにしていた人など、状況は人それぞれですが、ぜひとも今持っている夢を諦めないでください。その夢を達成する機会がいつ来るのか分かりませんが、その時のために今からでも準備を始め、いざチャンスを得た時には良いスタートが切れるようにしてください！

イタリア・トリノ留学を 半年間経験して

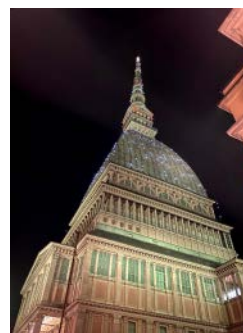
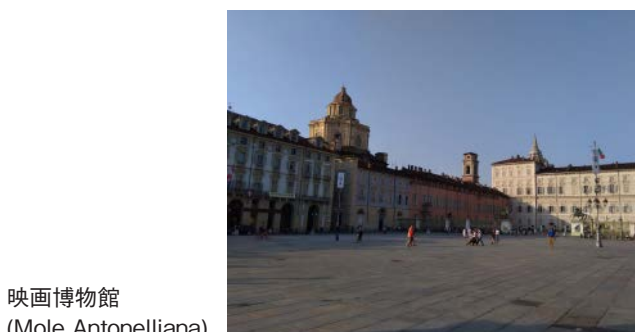
教養学部ヨーロッパ・アメリカ文化専修ヨーロッパ文化専攻 4年
のぞきなゆ
野崎那由

2020年3月10日、朝いつも通り起きてスマホを確認すると私は驚いた。埼玉大学から帰国要請のメールが来ていたのだ。私は当時北イタリアのピエモンテ州にあるトリノ大学に交換留学生として滞在していた。あと半年滞在するはずだったイタリアを急に離れなくてはならなくなった原因は、他にもないイタリアでの新型コロナウイルス感染拡大だ。

ここでは、コロナ禍の中で海外に滞在していた1人の人間としての経験を文書に残したい。コロナウイルスが流行する前の生活の様子や、どのようにイタリアでコロナウイルスが拡大していったのか、その間自分が何をやっていたのか、何を思いながらイタリアに滞在していたのかなどを中心に述べ、少しの間だが海外でどのようにコロナと向き合っていたのかを伝えたい。

1. コロナ禍が起こるまでの留学先の様子

まず始めに、コロナ禍が起こる前に留学先ではどのような生活を送っていたのかを簡単に紹介したい。私がイタリアのトリノに飛び立ったのは、2019年9月8日のことだった。私は最初に大学の隣にある2人部屋の寮に住んでおり、ルームメイトは同じ埼玉大学から来た日本人の留学生だった。授業が始まるのは10月からだったため、9月中はとにかくトリノを満喫しようと思ってルームメイトと街に出たり、同じ埼玉大学からの留学生の紹介で日本語を勉強しているイタリア人と友達になって彼らと食事を取ったりして楽しんだ。



授業が本格的に始まったのは10月からだった。トリノ大学の授業は1コマ90分で同じ授業が週に2、3回あるため、埼玉大学での履修のように1週間に何科目もの授業を取ることはできなかった。私は前期に4つの授業を取っており、その内1つの授業は1週間に4日、また1日に2、3コマあり、他の授業との兼ね合いを見て調節するのが難しかった。授業が終わる時期にも違いがあり、10月中に終わる授業もあれば12月まで続く授業もあった。

私は留学生向けの初級イタリア語の授業も取っていた。そこでは、イタリア語をほとんど初めて習うような留学生が集まっていたため、その授業で友達をつくることもできた。先生はとても明るくフレンドリーな人で、先生主催の留学生のパーティーにも参加することができた。

このパーティーでは母国の料理を何か一つ持ってくるという条件があり、私は一緒に授業を受けていた埼玉大学の友達と一緒に唐揚げと巻き寿司を作った。みんなが寿司を非常に楽しみにしており、私たちが到着した瞬間に作った寿司が一瞬にして無くなったのはとても嬉しかった。今まで話したことのなかった友達もこれがきっかけで話しかけてくれたこともあり、このパーティーで留学生同士の距離が縮まったことを感じた。またこの頃になると現地での友達も増え、一緒にカフェに行ったり友達主催で餃子パーティーを開いたりしたのもとても楽しかった思い出である。

12月には前期全ての授業が終わり、冬休みである1月から2月は主に前期の授業のテストとレポート執筆の期間だった。そのため、年末から1月中旬まではほとんどレポート執筆に時間を費やし、かなり苦労したのを覚えている。英語で5600語以上の私にとって最長のレポートを書くのはつらいと思うこともあったが、一緒に授業を受けていた友達と時々おしゃべりをしたり、軽食を食べたりしながら執筆していたおかげもあって気分転換ができ、最後まで諦めずにレポートを完成することができた。このことは、今でも私の自信に繋がっており、自分を鼓舞する材料にもなっている。

レポート執筆後、1月下旬から2月上旬にかけてはヨーロッパ周遊旅行をし、ローマ、ミラノ、パリ、ロンドン、バルセロナ、フィレンツェを訪れた。2週間かけて6か所も回ると体力を使って疲れた場面もあったが、イタリア以外の国を訪問してヨーロッパという地域内でもさまざまな違いを見ることができ、とても面白かった。

このように、イタリアに新型コロナウイルスが拡大する以前は、普通に授業を受けて休みの日は買い物や旅行に出かけたり、時には友達と集まってパーティーをしたりして楽しんでいた。長期休みに入ると、長いスパンで旅に出ることもできていた。しかし、2月末からイタリアにも新型コロナウイルスの影響が拡大し始め、そのような生活が一変

することとなった。

2. 新型コロナウイルス感染拡大とそれによる帰国の経緯

私が新型コロナウイルスのことを知ったのは、1月上旬のことだった。NHKのウェブニュースで、中国で原因不明の肺炎が流行しているという記事を見たのが最初だったが、この時はまだ「中国が大変そうだな」と軽く思っているだけだった。

危機感を覚えたのは、横浜港に到着した大型客船「ダイヤモンド・プリンセス号」での新型コロナウイルスの感染が明らかになった時だった。国境を越えてウイルスが拡大しているということは、世界に拡大する危険性もあると思ったからだ。このニュースはヨーロッパ周遊旅行の直前に報道されたため、この旅行中もしかしたらアジア人差別のようなものに遭うかもしれないという漠然とした不安が私の心の中にあっただ。

周遊旅行からトリノに帰ってきた2月上旬、この2週間で新型コロナウイルスのニュースが世界各地に行き渡っていたため、イタリアでアジア人がからかわれることが増えてきた。もちろん私も例外ではなく、嫌な思いをすることはあったが、同じく日本から来ている留学生と情報を共有して私だけではなく皆同じ思いをしているということが私を支えてくれた。また、このような中でも変わらず優しく接してくれる現地の方々もいたため、差別をしてくるのはほんの一部の人だけで、他の多くの方は私たちのことを何とも思っていないということを中心に留めて過ごしていた。

イタリアで初の新型コロナウイルス感染者が出たのは2020年1月30日、新型コロナウイルスによる死亡者が出たのは2月21日のことだった。当時感染者が出ている地域は北イタリアだったため、北イタリアの多くの州ではイベントの中止や学校の休校を実施しており、トリノがあるピエモンテ州も23日に全ての学校が休校となった。美術館や博物館も休館となったため、その後私はほとんど家で過ごしていた。この頃には、すでに寮を出て一人暮らしをしていたため、部屋ですっと1人でいるのが精神的に非常につらかった。

死亡者が出た2月21日時点でのイタリアの新規感染者数はまだ16人だったが、3月に入ったころには100人を超え、その後感染者数は劇的に増えていった。3月7日には1000人を超え、9日には日本外務省によるピエモンテ州の危険レベルがレベル3（渡航中止勧告）になってしまった。

3月10日の朝、埼玉大学から帰国要請のメールが来ていた。私は「まだイタリアにいることはできないか」と国際室に問い合わせたが、「滞在することはできない」と返答が来たため、急いで部屋を片付け帰国の準備をして3月13日の便で日本に帰った。帰国準備をしている間は自分が帰国するという実感が全くなく、とりあえず早く準備をして

帰らなければという気持ちでいっぱいだった。ロックダウン中の街は信じられないくらい閑散としており、最後に見るトリノの風景がとても寂しい光景だったことは非常に心残りだ。

日本に帰国してからもモヤモヤした日々が続いていた。羽田空港に到着するとすぐにPCR検査を受けた。8時間後に結果が出るまでは空港を出てはいけなかったため、待機室で映画を見たり友達と話したりして時間を潰していた。長時間のフライトで疲れた体のまま待機室で8時間を過ごすのは、結構しんどいものだった。

結果は無事陰性だったが、家に帰っても2週間の隔離生活を経なければならず、1日の大部分を1人室内で過ごしたことにストレスを感じた。しかし、そんな中でも少しでも快適に過ごそうと、家族や友達と電話で会話をしたり、今までしたことのなかった室内でできる趣味を試してみたり、留学期間中に学んだ語学を忘れないように勉強を続けたりなど、できるだけ有意義に時間を過ごそうと努めることで2週間の隔離期間を乗り越えた。

このようにコロナ禍前と後では留學生活が一変しており、さらに急な帰国要請だったため、留學中にしたいこともやり遂げたとは言えない状態だった。しかし、新型コロナウイルス流行という歴史的最中に留學生として海外に滞在できたのは、つらくもあったがこれからの人生に影響を与えるような貴重な経験になるだろう。

このような不測の事態の経験を生かして、今後留學を希望する埼玉大学生に助言したいことが一つある。それは、日本の外務省が出す危険レベルの基準とそれに伴う大学の対処について前もって知っておくことだ。私が見つけれなかっただけかもしれないが、埼玉大学のホームページや留學前に配られた資料には、外務省の出す危険レベルに伴う大学の処置が書いていなかったように思う。

トリノ大学には埼玉大学だけではなく、さまざまな大学から日本人留學生が来ていたので、私は彼らの大学の情報を頼りに外務省の危険レベルに伴ってどのように行動すれば良いかを参考にしていた。私が滞在していたピエモンテ州の危険レベルは1日にして0から3に引き上げられたため、大学から帰国要請が出たのは本当に急だった。

このような時には、緊急事態時に自分がどのような行動をすれば良いのかを周りを頼りに自分から情報収集すると、不測の事態にも臨機応変に対応できるのではないかと思う。また私の周りには外務省の危険レベルが上がる前に帰国する決意をした友人も数人いたため、不安を感じたら政府や大学から言われる前に自分から行動することも大切だと思う。

憧れのフランスでの 留学を経て

教養学部 4 年グローバル・ガバナンス専修国際開発学専攻 4 年

のだがしらまえ
野田頭真永

このコロナ禍での留学を通して私が一番強く感じたのは、「自分の一番やりたいと思っ
たことは、後回しにしてはいけないこと」です。このことは、私の体験談を読む方にも
強く伝えたいです。なぜこの思いを伝えたいのか——。ここからは、私の予期もしてい
なかつた留学記に少しお付き合いください。

私はフランス北部、ベルギーとの国境に位置する都市リールにあるリール政治学院に
2019 年 9 月から留学していました。なぜフランスなのかという理由は単純で、ずっと
行きたかった国だからです。みなさんは、「ベルサイユのばら」という日本が世界に誇る
漫画をご存知でしょうか。そうです。あのオスカル様がとにかくカッコいい、最高の漫
画です。真面目に言うと、フランス革命記を描いている漫画です。みなさんも、フラン
ス革命やマリー・アントワネットなら知っていますよね。気になった人は、埼玉大学教養
学部図書館に全巻そろっているのので、借りてみてください。

さて、フランスが大好きになったきっかけは
漫画でしたが、真面目な理由もあります。食品
ロスをご存知でしょうか？ 最近、日本でも話
題にのぼることが多くなった、本来食べられる
のに捨てられてしまう食品のことです。こうして
捨てられてしまう食品がたくさんあることや、日
本にも食料を買えずに苦勞している人がいること
に、食べるのが大好きな私はショックを受けまし
た。いろいろ調べていると、フランスはなんと食
品ロス削減の先進国だったのです。これは現地
で、歴史も食品ロスの対策も学べるチャンスなの



ベルサイユ宮殿庭園にて。

では!?!?と思い、政治学が学べるリール政治学院への留学を決めました。

憧れのフランスで、私はとにかくいろんなところに行きました。小学生の時から行くことを夢見ていたヴェルサイユ宮殿では、感動のあまり泣いてしまったほどです。フランス滞在中に5回は行きました。ルーブル美術館にも5回くらい行ったのではないのでしょうか。それでも全て見終わることはありませんでしたが。フランスには、世界遺産、美術館、博物館など留学生でも学生証を見せれば無料で入れる施設がとて多く、学生に優しい国です。もちろん、ヴェルサイユ宮殿もルーブル美術館も無料です。こんな素晴らしいチャンスはあるでしょうか(いや、ない)。とにかく、暇さえあればどこかにかけていた気がします。

もちろん、勉強もしていました。大好きなフランスの歴史からEU政治、ヨーロッパ哲学の授業なども受講し、フランス語で開講されたフランス政治制度の授業にも挑戦しました。正直、何を言っているのかさっぱりだったので、フランス人の友達とフランス語がペラペラな留学生の友達に助けてもらってばかりでしたが。シンガポール出身の教授が教える日本の文化、教育、ジェンダー、外交政策などの授業にも参加しました。日本の部活について教授が説明する中で、「帰宅部」を「going back home club」だと真面目に解説していた時には爆笑してしまいました。「going back home club」に所属する日本人学生は家に帰って何をするのか、私の友人は説明を求められて困惑していました。日本とは違って学生からのプレゼンで始まる授業が多く、プレゼン準備や発表中は緊張

しましたし、苦労も多かったです。レポートについても、その分量の多さに圧倒されました。でも、リール政治学院の先生方は「失敗を恐れるな」とよく言い、まず何でも聞いてくれてたくさんアドバイスをくださいました。本当に素敵な大学で勉強できて、幸せでした。

私が留学していた時、コロナ以外にも歴史的な出来事があったのでご紹介しますね。実はストライキがもっとも長期化した年だったんです。フランスはストライキを通して学生からお年寄りまで、いろいろな人が政治的意見を述べます。「ストライキは私たちにとって重要な



ストライキで閉鎖される校門。

政治参加ツールだ」と、フランス人の友人や教授が発言していました。実際に、ストライキ参加のために教授や生徒がいなくなるので授業が休講になったり、学校自体が柵やゴミ箱で封鎖されたりしました。私にとってはとても興味深く、その時期はマクロン大統領の政策に対して生徒同士で学食でも議論し、たくさんの人が政治参加している様子を見てうらやましくも思うことも。でも、ストライキの一環で地下鉄やバスが便数を減らしたり運休したりして、それが何か月も続いたのはとっても不便でした。ちょうどその時期に家族が旅行に来て、案内したかったのですが、移動手段がなくて観光地をまわることがあまりできなかつたので、今度また連れて行きたいですね。

いろいろな苦勞や言語の壁で困ったこともたくさんありましたが、それでも日々楽しい留学生活を送り、ようやくフランスに慣れてきてあと半年頑張るぞ!と思い、第2セメスターの始まりに気合いを入れていたころ……。本当に前触れなく、あの悪夢がやってきました。もちろん、中国を中心にアジアで新型コロナウイルスの感染が拡大し、日本でもクルーズ船などが話題になっているのは知っていました。でも正直アジアの話だと、遠いところでの話だと思っていました。

2020年2月末、私の大学は2週間の春休みだったため、友人とイタリア旅行に行きました。そろそろ旅行も終盤というころ、イタリア北部で新型コロナウイルスが爆発的に感染拡大しました。「うわ、ついにヨーロッパにもきたか……」と思いましたが、そこまで危機感は抱いていませんでした。旅行を終えてフランスに戻り、さあ授業だと大学に行こうと思った時、友人から電話がきました。

「この春休みにイタリアを訪れた生徒は、大学に来ないようにってメールが来てる!」

早速チェックすると、イタリアを旅行した生徒は2週間自宅待機し、どの都市を訪れたかメールをするように、と連絡がきていました。この時初めて「もしかしてやばいかも」という感情を抱きました。2週間の自粛期間を終えて大学に戻る頃には、フランスの南部、イタリアとの国境地域からコロナの感染がすでに拡大し始めていました。そして自粛明けの最初の授業で、教授から衝撃的なことを伝えられました。

「きっと今週が最後の授業になるよ」

正直、学生たちは「え?」と困惑した顔をするか、「いやまさか」みたいなことを言って、笑っていました。でも、教授の言ったことは本当になりました。



からっぽのパスタコーナー。

その週の金曜日、マクロン大統領から学校を休校にするようにと声明が発表されました。そこから、フランス各地で感染が拡大するまでは本当にあっという間でした。スーパーは店前で並ばないと入れず、入れても棚から商品はすでになくなっていたり、マスクをすることが当たり前になったり、また外出が禁止されるようになって許可証がないと外を出歩けなかったりという状態になりました。



そして、初めて差別的な言葉や行為を受ける経験をしました。私の留学先はパリではなく北部の都市なので、アジア人が珍しかったということもあったと思います。「コロナウイルス」「帰れ」と言われたり、道を歩いていて避けられたり。大好きなフランスが初めて嫌いになりかけるほどに、ショックを受けました。スーパーに行くことすら怖くなり、家に一日中いる日が増えました。ご飯も食べられず眠れない時も多くありました。埼玉大学から帰国要請があり、航空チケットを急遽購入して1週間くらいで荷物をすべて捨てて家を引き払って……と帰国準備をしている時も、「飛行機が飛ばなくなる」、「空港までの電車がいない」というようなデマ情報に気が気でない日々を過ごしました。デマだとわかっているにもかかわらず、混乱してしまいました。こんな状況になる前だったら、政府からで出る情報だけに耳を傾ければいい、と冷静になれたかもしれませんが、この時は全然ダメでしたね。自分は精神的に強いと思っていたし、そう簡単にデマ情報に踊らされたり混乱したりしないだろうとも思っていたのですが、実際は帰国することに精いっぱい、日本に着いて両親の声を聞いただけで泣いてしまい、それほど緊張した中にいたんだろうと振り返って思います。

新型コロナウイルス感染拡大がヨーロッパで始まってから帰国するまでを約4000字で表しましたが、これはたった1か月の間の出来事でした。1か月の間にいろいろなことが起き過ぎて、書ききれません。本来ならもっと友達と遊んで、ヨーロッパ各地を旅行して、フードバンクのボランティアもする予定でした。しかも、楽しみは最後にとっておきたい派なので、行きたかった場所や国は最後にと考えていたので、行く機会を逃してしまいました。ボランティア活動もフランス語ができてからじゃないとダメだからと、挑戦を後回しにしていました。結果、やりたいことは成し遂げることができませんでした。帰国して状況を整理できるようになってから、心から思います。「自分が本当にやりたいこと、行きたい場所はすぐに実行しなければダメだ」ということを。本当に何が起きる

のか分からないので、「これはいつかできるか」とか「後でできればいいよね」みたいな考えは、後々本当に後悔します。だから私は、もう後悔しないように、自分の一番の思いを優先して動くようにしています。あの混乱期をくぐり抜けられたのだから、きっと何があっても大丈夫だろうという精神で挑んでいます。これを読んでもくれたみなさんにも、もしやりたいことや自分の強い思いがあるなら、それに思い切って挑戦して欲しいです。

後半は真面目な話しましたが、本当にフランスはいいところです。コロナ禍の留学で大変だったことを書きましたが、留学やフランスでの生活の楽しさが前半でお伝えできていればと思います。この状況が落ち着き、また自由に旅行できるようになったら、絶対に戻ります。またおいしいワインとチーズを求めて！



留学を延期し心新たに

教養学部ヨーロッパ・アメリカ文化研究専修ヨーロッパ文化専攻 2年

あらいしの
荒井紫乃

私は約2年前に埼玉大学に入学しました。埼玉大学は私が高校1年生だった頃から第1希望に掲げていた大学で、合格したことを知った時は、「今まで生きてきた中で一番幸せだ」と高校生ながらに感動した記憶があります。

埼玉大学を志望していた理由は、交換留学制度が非常に整っており、またキャンパス内でも留学生と触れ合うことができるという魅力からでした。しかし、新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナ)の影響により、予定されていた留学の見通しは立たなくなっていました。留学の延期は、新型コロナが私に与えたダメージの中で一番大きいものです。

私は2020年の9月から、21年の8月まで、約1年間の交換留学に行く予定でした。場所はオランダのトゥエンテ大学で、入学前からずっと行きたかった大学の一つです。新型コロナが発生する前から留学準備に取り掛かっていて、トゥエンテ大学と連絡を取り合ったり、同じく交換留学制度を利用して留学する予定の友人とも留学の目標ややりたいことを語り合ったりしていました。

そんな矢先、新型コロナが徐々に流行り出し、希望に溢れていた会話の内容も、留学から未知のウイルスに変わりました。緊急事態宣言発令という物語の1ページのようなことが起ころうとした時、私は今秋の留学は無くなるのだろうと悟りました。

最初の緊急事態宣言が発令される直前に、私は埼玉県にあるアパートから地元の栃木県に帰省しました。帰省と言っても長期休みにするような気軽なものではなく、半ば引越しのような大掛かりな準備を伴った帰省でした。いつもは電車で帰省していましたが、その時は両親が埼玉県まで車で直接私を迎えにきてくれました。

初めてのことで混乱していましたが、常に「留学へ行けるのだろうか」、「私が獲得したトゥエンテ大学への留学の権利はどうなるのだろうか」、「オランダは安全なのだろうか」といったことを考えていたことを覚えています。

最終的に、留学は2021年の秋への延期となりました。そのため、20年上半期はIELTS（アイエルツ）などの英語資格試験を受け直したり、留学に伴って退会する予定だったオンライン英会話教室を継続したりと、さまざまなことに取り組みました。

現在も新型コロナ感染者は増加の一方をたどっています。現在の正直な気持ちは、今年の秋からの留学もまた行けないのだろうという後ろ向きなものです。埼玉大学との取り決めでは、今秋に出発できない場合、留学の再延長はできないことになっています。また22年以降の留学の権利を新たに獲得して行くことができたとしても、2年間埼玉大学を留年することになってしまうため、これはあまり現実的な考えではありません。

このことから、今秋が最後のチャンスですが、良くなるどころか悪化する世界の現状に希望を見出すことができません。「いかなる時でも夢を諦めてはいけない」という正論が頭の中にあっても、期待して叶わなかった時のショックが怖いので、留学に行けなかった場合の自分の人生プランを、どう描いて心に折り合いをつけるかということを常に考えてしまいます。

留学のことを考えると、今でも泣いてしまいます。しかし、せっかく獲得した埼玉大学での学生生活なので、私はコロナ禍の中でできることを最大限しようと思直しました。まずは、今までの取り組みを続けるだけでなく、レベルアップしようと考えました。

中学生のころから継続しているオンライン英会話では、レッスンの主軸を講師の方とのディスカッションにしたり、英語の資格試験に向けての勉強時間を増やしたりしました。これらを行うと、語学力向上に結び付く気がして明るい気持ちになり、やる気が出ます。

また、新たなことにも取り組み始めました。一つ目は、公務員試験の勉強です。私は今まで漠然と公務員になりたいと考えてきましたが、新型コロナによって難航する就職活動を目の当たりにして、将来の目標を早く確定させなければいけないと考えるようになりました。留学の件と同じくらいに不安な就職活動への不安を、試験勉強に取り組むことでできるだけ払拭しようとしています。

二つ目は、ピアノの練習です。私はさまざまな楽曲をピアノで弾けるようになりたいという夢を持っています。コロナ渦で家にいる時間が大幅に増えたため、今までできなかったピアノの練習に十分な時間を割くことができ、単純に嬉しさを感じています。今まで運動系の習い事しかしてこなかった私にとって、ピアノと向き合う時間は新鮮であり、大人になってからこのような感覚を味わえると思っていなかったため、貴重な経験となりました。

三つ目は、インターンシップへの参加です。埼玉大学はJR東日本と連携した、課題解決型インターンシップを授業で取り入れています。このインターンシップも、私が埼玉

大学でやりたかったことの一つであり、留学が延期になったために、2年生の後期で参加しました。

社会人の方と課題解決のための解決案と一緒に考えて議論をし、実証実験などを行う体験はとても新鮮で、普段の学生生活ではなかなか経験できないことだと実感しました。この経験を通じて、たくさんの方が私のような学生のために多くの時間と労力を惜しみなく使ってくださっていることを知り、今自由に学ぶことができている環境に改めて感謝をしました。

四つ目は、教員免許の取得です。現在私は英語の高等学校教諭1種免許状の取得を目指していますが、これに加えて中学校の免許も取得したいと考えるようになりました。来学期(3年前期)から授業がない時間が大幅に増える予定のため、自身の将来の選択肢を広げるためにも空き時間を新たな資格取得に向けて有効活用したいと思っています。

以上のことが、私がコロナ禍で取り組んでいることです。これら全てのことは、私の人生は新型コロナによって止まってしまったのではなく、常に進んでおり、立ち止まっている暇はないのだということを実感させてくれます。

また、これらに取り組むことで、自分自身がレベルアップと感じて前向きな気持ちになることができます。新型コロナがなかったら実行していないことも多々あって複雑な心境ですが、とりあえず今は私自身も私の大切な人たちも健康に暮らし、新たなことに集中できる環境にいる状況に感謝をしています。

勉学以外にも新型コロナによって変化したものが多々あります。その一つが、人間関係です。冒頭にも述べた通り、私は4月に地元へ帰省しました。そのまま9月前半まで実家に滞在していたのですが、後半からは埼玉県にある自分のアパートで暮らすことに決めました。

引き続き実家で暮らすこともできたのですが、一人暮らしの方が良いと自分で選択しました。周囲の人からは戻ることに對して、懐疑的な考えをたくさん聞きました。家族との時間は好きで、いつも私を思いやってくれる家族には感謝してもしきれないのですが、実家での滞在を選びたくなかったのも事実で、そんな自分が薄情者のような気がして当時は自己嫌悪に陥っていました。

しかし、英会話の先生にこのことを話して、「きっとあなたは大人になって、自立したがつているのよ」という言葉を聞いたとき、私は自分がいつの間にか精神的に大人になっていたことを実感しました。家族との良好な関係性は変化していませんが、いい意味で

の距離感は変化しました。現在一人暮らしをしてお金はまだ稼げませんが、自分のことを自分で行い、生活することに喜びを見出しています。


また、友人との人間関係も変化しました。もともと友人たちと電話をすることが好きだったのですが、新型コロナ後は電話の時間がさらに増え、それに伴ってより深い話をするようになりました。家族にも話していないようなことを一緒に共有できたり、直接会っていなくても一緒に過ごす時間を心の底から楽しめたりできる存在に出会うことができ、非常に嬉しいです。

そして、3密を避けなくてはならないという状況から、友人と会ったり遊んだりする機会に対して慎重な考えをとるようになりました。新型コロナ前は特に何も考えずに誘われたら遊びに行く、週末は友人との予定で埋めるといった生活を送っていましたが、この生活について改めて考えさせられました。

もちろん、今まで友人たちと過ごした時間は大切なものです。しかし、今まで散々遊んできた分、これからの時間は自分の人生をレベルアップさせるために使っていこうと思うようになりました。特に第3波が来た後は、自由な時間をほぼ全て自分のことに使っています。これは大学生だからできることだと思うので、毎日を大切に過ごしていきたいと考えています。

一日も早い新型コロナウイルスの終息を願っていますが、もしこの状況が、私が考えているよりも長く続いてしまうものであったとしても、どこかに希望があることを忘れないでいたい。「留学のために大学に進学したのに、私は日本で何をやっているのだろう」という思いと、新しいことに取り組むことへの喜びの感情が毎日拮抗^{きっこう}している中でも、私の大学生活を後悔のないものにするために毎日を生きていきたいと現在考えています。

「コロナがあったけれど、素敵な人生を歩んできた」と言えるような生活をしていきたいと思います。



留学への思いを オンライン新歓にぶつける

教養学部グローバル・ガバナンス専修国際開発専攻 4年
かまだ
鎌田ほのか

はじめに伝えたいこと

これから私がつづるのは、留学体験記ではありません。私は、留学に行っていません。正確には、行くことができませんでした。新型コロナウイルス感染症の影響により、ずっと温めていた留学計画は白紙に。現在は、埼玉県の家を引き払って実家に戻り、本来であれば帰国後に始める予定だった就職活動と向き合っています。

さて、せっかくこのような素晴らしい機会をいただいたのですから、何か読者のみなさんの心に残るような文章を書きたいと思い、何度も何度も書いては消してを繰り返しました。しかしながら、冒頭でもお伝えしたとおり、私は留学に行っていません。皆さんが知りたいであろう海外の様子や、留学の赤裸々話をすることはできません。

私がこれから記すのは、1人の大学生として、このコロナ禍をどう受け止めてどう過ごしていたのか。一方で、留学に対してどのような思いや葛藤を抱えていたのか。そんな内容となります。コロナと、そして留学と向き合った過去の私自身、そして、これから長い長い大学生活を送る後輩たちへ送る手紙のようなものだと思ってください。そんな大それたものではありませんが、どうか最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

留学に対するの思いと葛藤

私が留学を決めたのは、2019年12月ごろ。就職活動が軌道に乗り始めた一方で、「大学生活でもうやり残したことはないだろうか」と考えるようになったのがきっかけです。思いを巡らせる中で、私がやり残したこととして最初に挙げたのが留学でした。社会に出る前に、1度日本を客観視したい。海外で生活してみたい。1年生の時からひそかに考えてはいたものの、時間やお金を言い訳にしてできていなかった留学を、卒業前に叶えよう決めました。

元々私は英語圏に憧れがあったため、アメリカ人の友達に相談をして、彼の母校であ

るアメリカ合衆国のボーリング・グリーン州立大学に出願。合格通知が届いた後は、履修計画を立てながら、現地でやりたいことのリストアップを重点的に行いました。日本とアメリカの教育システムの違いに興味があったため、①教育系の授業やアメリカの風土・文化に関わる授業を履修して知識をインプットする、② Japanese club に所属して友達を増やして海外の人たちの価値観に触れる。以上2つを実行しようと決めていました。

“卒業を1年遅らせて留学に行く”。今までの人生で、自分の意志決定によって通常とは異なるルールを歩くことがなかった私にとって、この決断は勇気のいるものでした。しかしこの時は、新たな環境に飛び込むことができるワクワク感が大きく、ただひたすら待ち遠しい気持ちでいっぱいでした。

そんな夢いっぱいの留学計画が突如白紙になったのは、2020年5月初旬。この頃はもうバイトもなくなり、ただひたすら家の中で引きこもる生活を送っていました。友達にも会えず、外に行くのは食事を買に行く時だけ。心に重い鉄の塊がのしかかったまま、ただ淡々と毎日を過ごしているような、そんな感覚でした。私はもともと考え込みやすい性格なので、1人で過ごす時間が増える分、考え込む時間も増えていきました。

「果たして留学に行けるのか」、「行けたとしても現地は安全なのだろうか」、「帰国してから就活が上手くいかなかったらどうしよう」と、考えても仕方がないことだとは分かっていたけど、収まることのないモヤモヤとした気持ち。最初のうちは、同じ時期に留学を計画していた友達と頻繁に連絡を取り合い、お互い励まし合ってなんとか留学への思いを保っていましたが、いつまで経っても変わることのない状況に、だんだんと限界を感じるようになりました。そして私は、自分から国際室に連絡を取り、留学をキャンセルすることに決めたのです。

全てが予想外で計画外。今まで積み上げていた思いが、バラバラと音を立てて崩れたような感覚に襲われました。何のために卒業を遅らせたのか。何のためにここまで必死に計画を立ててきたのか。行き場のない思いがこみ上げ、時には涙となってこぼれ落ちることもありました。しかし同時に、大きな安心感も芽生えたのです。それは、卒業を延長してまで留学に行くことを決断してから留学計画が白紙になるまで、自分自身の中でさまざまな葛藤があり、それと必死に闘っていたからだと思います。その葛藤ともう闘わずに済むと思うと、少し心が軽くなりました。

絶望と安堵が同時に襲ってくるこの感覚は、今まで経験したことがありません。自分の中で整理するまでに長い時間が必要でした。留学への思いと葛藤、そしていつまでも変わる気配のない現状。引きこもり続ける日々。今だからこそこれほど冷静につづるこ

とができていますが、たった1つのウイルスによってここまで自分の人生が変化し、感情が揺れ動くことになるとは思っていませんでした。

「逆境は楽しんだもん勝ちですから」

さて、前半では随分と暗い話をしてしまいました。でも当時、日本中の多くの大学生があのような葛藤やモヤモヤを感じていたと思います。特に1年生は、これから始まる大学生活への大きな希望や大志を容赦なく砕かれたと言っても過言ではありません。その苦しみは想像を絶するものだと思います。

大学生だけがこんな理不尽な状況に置かれている。そう感じたことが何度もありました。全国各地から人が集まる大学のキャンパスがクラスター源になりうることは、当事者である大学生全員もよく分かっていることです。だから大学生が大きな制限を強いられていることも分かっています。多くの大人が「オンラインで我慢をしろ」、「ぜいたくを言うな」と言っていたことも知っています。しかし、そんな状況に置かれている大学生がづらい思いを抱えていることには変わりはないのです。それを認めて受け止めて、「つらいよね。よく頑張っているね。ありがとう」と慰めてくれる大人たちが、当時はあまりに少なかった。そう思います。

1年生が苦しみ声を上げているのは、4月の上旬くらいから気づいていました。本来に便利な時代になったとつくづく思います。「こんなはずじゃなかった」、「どうして私たちだけ我慢しなきゃいけないの」、「授業受けるの不安だな……」。本来気づくはずのない彼らの声は、SNSを通してしっかりと届いていました。

一方私は、留学への葛藤をもんもんと抱えながら、家にこもって毎日を過ごす日々。目の前で苦しんでいる1年生を、ただ見守ることしかできない自分に腹が立っていました。彼らのために何かしたい。これから始まる大学生活への希望を0にしてほしくない。そんな思いを形にしたのが、「埼大オンライン新歓2020」です。

「埼大オンライン新歓2020」は、Twitter上でオンライン合同企業説明会を企画しているとある企業から着想を得たものです。昨年設立したサークルの仲間に声を掛け、一緒に企画・運営を行いました。Zoom上に埼玉大学のサークルや部活動が一堂に会し、リアルタイムで活動説明と質疑応答を行う。1年生は各サークルのTwitterから質問を送る。そんな仕組みを作り、先輩と後輩がよりリアルな形でコミュニケーションを取れるように工夫しました。

開催まで約2週間。初の試みともあり大きな不安を抱えながら、なんとか準備をしていました。準備を進める中でこの企画は1年生の期待だけではなく、サークルを運営す

る立場である上級生の思いも背負ったものであることを実感し、余計に背筋が伸びました。中途半端なことは絶対にしたくない。どうせなら最高なものを作りたいと、とにかく無我夢中で取り組んでいたと思います。

私がここまで前向きに頑張ることができていたのは、埼玉大学生からの期待を背負っているという責任感ももちろんありました。しかしもう1つ、大きな原動力となる言葉がありました。一緒に運営を行っていた仲間が、ミーティング中にこう言ったのです。「逆境は楽しんだもん勝ちですから」と。目からうろこが落ちる思いでした。ここまで大学生が理不尽な状況にあり、かく言う彼もその当事者の1人であるにもかかわらず、今を全力で楽しもうとしている。暗い顔をして毎日をなんとなく過ごすくらいなら、今許される範囲で、自分からチャンスをつかみに行く。その方が絶対楽しいから。

“逆境を楽しむ”。確かに、そう簡単ではないと思います。しかし私は、彼のそんな言葉に背中を押され、「どうせならこの状況を全力で謳歌^{おうか}してやろう」と思うようになりました。周りの大人が嫉妬するくらい、前向きで明るい大学生の姿を見せてやろうと、意気込むようになったのです。

イベント当日は、約400人の1年生が参加。50人以上の上級生と5人の有志と協力して作り上げたこの企画は、文句なしの大成功に終わることができました。オンライン新歓は、本来1年生や上級生のことを思って企画したものでしたが、巡り巡って私自身が前を向いていくための大事なステップとなっていたと思います。協力してくれた仲間はもちろん、参加してくれた生徒の皆さんには感謝の思いでいっぱいです。

最後に

コロナウイルスによって留学計画は一瞬にして消え、日々の生活も一変しました。留学に行くことができなかつたのはとても残念ですし、海外への憧れは拭い去れないままです。しかし同時に、この状況だからこそ気づかされたことや経験できたこともあります。この状況でしか出会えなかつた人たちも大勢います。この貴重な体験をアフターコロナの時代に生かしていけるように、誰かのために役立てていけるように。今は、自分がやるべきことに真っすぐ向き合っていこうと思っています。

この文集を読んでいる方の中には、これから留学を考えている学生さんもたくさんいることでしょう。私と同じように、留学への期待や憧れが募る一方で、不安や戸惑いも大きいかと思います。周囲からの声に押しつぶされることもあると思います。でもどうか、希望を0にはしないでください。逆境こそ力に変えて、楽しんで前を向いていくことができる方法を、最後まで諦めずに探して欲しいと思います。1人でとは言いません。周りの

先生方や友達、家族や先輩を頼りながら、たまには弱音も吐きながら、少しずつ進んでいってください。私も皆さんに負けないよう、前を向いて頑張っていこうと思います。

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございました。



COVID-19 パンデミックを 日本で経験して

匿名希望

はじめに、コロナ禍で感じたこと、体験したことをリアルに書く際に、個人や企業の特定につながる可能性があるため、匿名で書かせていただくことをお許し願います。

2020年に入って間もなく、テレビやインターネットのニュースで「新型コロナウイルス」という聞き慣れない言葉を頻繁に耳にするようになった。連日のように伝えられる「中国が発生源」、「感染力が非常に高い」といった無機質な音声から、当時の私は現在の状況になることなど予想できなかった。そうは思いつつも^{りかん}罹患は避けたかったため、今となっては普通になった色付きや手作りのマスクを多少なりとも抵抗を感じつつ着用したり、手洗いうがいなどをしたり、できることは意識的に行った。

感染対策が叫ばれる中で、街中でほとんどの人がマスクを着用する、歴史の教科書で見たような光景を実際に目にした時、初めて「新型コロナウイルス」、「パンデミック」を実感した。

実際に自分の身の回りに影響が出たのは、去年の3月だった。緊急事態宣言発令後、掛け持ちをしていたアルバイトを新型コロナウイルスの影響でいずれも失うことになった。世の中の状況を考慮すれば致し方ないことであるのは理解できたが、携帯電話料金をはじめとする必要最低限の生活費を稼ぐため働くことが必要だった。

しかし、感染拡大に伴う経済悪化に加えて就職活動を控えた大学3年という条件も重なり、どこの企業にもアルバイトとして雇ってもらえなかったため、派遣業や食品宅配サービス業で慣れない業務をこなしながら食いつないだ。

また就職活動でも新型コロナウイルス感染症の影響は多く出た。今まで対策を行ってきた従来の面接方式とはうってかわって、リモート面接が主流になった。企業側も万全の対策は取っていたが、多くのトラブルが起きた。生活音や接続不良、音声などの問題

で気が動転してしまい、自分自信をうまく表現できないことが多くあったり、今後の情勢が読めない中で、第一志望の企業からの採用情報が滞ってしまって自分の将来に不安を感じたりと、ストレスに悩まされていた。

コロナ禍では、満足にストレスの発散もできなかった。友人と近況報告をしながらランチを食べたり旅行に行ったりと予定を立てていたが、全部取り止めになった。そうなってしまうと、家でテレビやスマートフォンとにらめっこをする機会が増えてしまったが、どのニュースサイトを見ても「新型コロナウイルスで〇〇に影響」、「本日過去最大の感染者数」とマイナスなことしか書かれていない。

気分転換にと SNS を見ても、現在日本が置かれている状況を理解できていない友人や知人らのマスクを外して飲み会を行っている写真や、のんきに旅行に行った旨の投稿を多く目にするようになった。嫉妬心を少し含んだ怒りを感じつつ、友人からの誘いを断り続けた。その都度「ビビってんの?」、「ちょっとくらい大丈夫だよ」とゾンビ映画では最初に死ぬであろう登場人物のセリフのようなものを多く掛けられたが、自分の身の安全を守りたい、身近な人間のなかで1番目にかかりたくないといった感情が大きかった。

また、両親との感染対策への認識の違いで、家庭環境が悪化したのも事実だ。両親は神仏に祈りさえすればこの感染状況は収まると思っているのか、執筆中の現在も集会に足を運んでいる。信仰心を持つこと自体は良いことだと思うし、個人の自由であると思うが、両親は手洗いうがい等ある程度エビデンスを持った感染対策が大前提であるといった私の考えとは差異があった。

実際に仕事や買い物から両親が帰宅した後、手洗いうがいの確認を行うと、「水で洗ったから!」などと逆鱗に触れてしまうことが毎日のようにあった。私は両親のことを思って声を掛けているが、毎日のように怒られ続けるとストレスを感じるし、何が正しいのか分からなくなることもあった。

このようにコロナ禍で個々人の良いところ、悪いところにかかわらず、本質が見えたと思っている。感染対策をしっかりと行う人、どこかで甘く見て「自分ファースト」な行動を取ってしまう人が露骨に現れた。

私自身、いろいろと我慢をして感染対策も徹底して行うことはできたという良い点もあったが、「自分ファースト」な人に対して嫌悪感に近い感情を持ってしまったり、ここには書けないようなひどいことを思ったりしてしまったことも事実であるように、自分の

心の狭さといった良くない点も知ることもできた。

しかし、ここまではマイナスなことしか書いていなかったが、プラスなことを発見できたのも事実である。前述の「リモート面接」もうまく活用できれば、グローバルな社会の発展に寄与できると思い、またコロナ禍で生まれた「リモート飲み会」、「リモート会議」なども離れた人、長く会えなかった人とつながるツールになると思っている。これらに限らず、今回のパンデミックがあったからこそ知ることができた有益なことを腐らせることなく、感染が落ち着いた後も有効に活用していきたい。

新型コロナウイルスに対して現在の日本では「政治家の責任だ」、「対応が遅い」と多く意見が飛び交っているが、果たしてそこだけの責任だろうかと思うことがある。新型コロナウイルスが鬼も滅することのできるくらいの刃になりかねないと一人一人が理解して、感染対策に全集中する世の中であってほしい。